九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 遠藤文学における「母なる神」 : かくれ切支丹調査から得た成果

池田, 静香

https://doi.org/10.15017/1398579

出版情報：九大日文. 21, pp.76-87, 2013-03-29. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

# 遠藤文学における「母なる神」

## ――かくれ切支丹調査から得た成果――

池田　静香（IKEDA Shizuka）

### はじめに

日本人の精神風土に合ったキリスト教信仰とは何かを追究した遠藤周作の文学は、『沈黙』（新潮社　昭41年3月）を一つの節目として把握されている。後年、作者自身が「第一の円環を閉じる」（「異邦人の苦悩」（「別冊新評」昭48年12月号）、引用は『遠藤周作文学全集13』新潮社　平12年5月　171頁に拠った）と振り返った『沈黙』は、肺結核再発によって、死をも覚悟した大患生活を経た遠藤が、「もしなおったら小説を書きたいとせつに思」（「受賞の言葉」（「中央公論」昭41年11月号）256頁）い、それまで日本人には縁遠いテーマだからと、婉曲に表現してきた信仰の問題を、「妥協もヘッタクレもあるか。好き勝手なことを書いてやれ」（「沈黙の声」（『沈黙の声』プレジデント社　平4年7月）79頁）という姿勢で臨んだ渾身の作であり、そこには、キリスト教の日本的変容という問題に取り組んだ成果である父の宗教から母の宗教へという転換が描き出されている（「異邦人の苦悩」176頁）。と同時に、この転換を描いたが故に、『沈黙』が激しい糾弾にあったということも、現在の遠藤研究では語り草となっているところである。

『沈黙』発表後、いちはやく作家の意図した母性的キリスト像とそこに潜む作者の母親（原）体験に気づき、指摘したのは江藤淳（「背教者の苦悩と悦び」（「朝日新聞（夕）」昭41年4月29日）、石内徹編『遠藤周作『沈黙』作品論集』クレス出版　平14年6月　27～28頁参照）だったが、江藤評に呼応するかのように遠藤が行った自作の妥当性主張のロジックは、日本の家庭における息子と母親の関係を、自分自身の母親体験や、感覚的に流布している日本人の母親意識へと置き換え一般化するという手順でなされる。それは例えば、司祭や宣教師の途絶えた日本に残されたかくれ切支丹（注、遠藤表記）に見られるマリア観音・納戸神信仰に日本人の精神風土の特徴を見出し、彼等が農村の母を模した納戸神やマリア観音を思慕しているのは、自身の母親への愛着や、第二次世界大戦下に戦死した兵隊たちが「お母さん」と叫んで死んでいったという事例の延長線上にある意識だと把握することで、母性的なキリスト像には、日本人の心の琴線に触れる感覚があるはずだと訴える説明方法のことである（例えば「父の宗教・母の宗教――マリア観音」（「文芸」昭42年1月号）『遠藤周作文学全集12』新潮社　平12年4月　374～376頁、「弱者の救い」（『切支丹の里』人文書院　昭46年1月所収）『遠藤周作文学全集13』103～104頁、遠藤周作×佐藤泰正『人生の同伴者』春秋社　平3年11月　27～30、151～156頁など）。そしてこの主張を強固なものとしていくなか、『沈黙』執筆の12年後となる昭和53年、遠藤はかくれ切支丹調査を通じ、更には浄土真宗信仰にまで目を向け、「日本人の宗教意識の中に（略）母親と子どもの関係というものがある」ことを理解出来たことが、『沈

黙』を書いた大きな成果だったと述べる（「ひとつの小説が出来るまで」（「本の窓」昭53年2月号）、引用は『お茶を飲みながら』小学館　昭54年10月　253頁に拠った）。この作者の感慨は、『沈黙』で提示したキリスト教の母性的側面は、神学的な批判に晒され誤解されるという不幸な運命を辿ったけれども、「日本人の宗教心に沿う」という観点から判断した時、『沈黙』での主張は確かな踏み石となるものであって、決して間違ってはいなかったのだと訴える声として、我々のもとに届くだろう。

遠藤の執筆スタイルは、長編の準備として短編を書き、長編で言い足りなかった部分をまた短編で書くという同心円上の反復性にある。『沈黙』を萌芽とする「母性的なキリスト教」は、『沈黙』の前奏曲となる短編を収めた『哀歌』（講談社　昭40年10月）所収作品を通して徐々に焦点化され、その後は、短編集『母なるもの』（新潮社　昭46年5月）に収められた実地調査を伴うかくれ切支丹研究を経て描いた短編たちを通して、確立されていった。また、遠藤が、『沈黙』批判の渦中にあって、今後の創作を通して、自作で訴えた母性的キリスト像がキリスト教の本旨を違えていないことを証明していきたい（「座談会　神の沈黙と人間の証言――遠藤周作『沈黙』の問題をめぐって」（「福音と世界」昭41年9月号）64～65頁）と語ったのであれば、遠藤文学における「母なる神」は、『沈黙』以後も考察を深めながら掌握されていった描写を考慮した上で、その真価が問われるべきだと考える。高い評価を受ける一方、多くの批判に晒された『沈黙』の母性的なキリスト像が、『沈黙』の「赦しの神」を萌芽として短編「母なるもの」（「新潮」昭44年1月号）で描いた「哀しみの聖母」像でひとまずの決着をつけたとするならば、遠藤による「母性宗教」の説明方法を幅広く参照することによって、作家の主張の根拠となったかくれ切支丹の信仰心への解釈や、自作における母親の描き方に揺れがあることをしる。そこで小稿では、遠藤文学における「母なる神」への取り組みを、『沈黙』を中心としながらその前後の表現を踏まえながら照射することで、遠藤作品の流れの中における『沈黙』の意義、ひいては「母なる神」の成立条件を再考することを目指す。

## かくれ切支丹調査の成果
## ――日本的「後悔と許しの信仰」とカトリック信仰の違い

カトリックにおける母性的な側面を強調した『沈黙』について、遠藤がその意図を自ら語った座談会（遠藤周作×井上洋治×三浦朱門「座談会　井上神父をかこんで」（「批評」昭41年8月号）での主張をまとめると、『沈黙』での試みは、次の3点にあった。

①「転んでもカトリックは見離されませんということ」。（120頁）

②「神は表面は沈黙してるけれど、われわれの人生を通して神が自分の存在を語り、自分の声を語っている」ということ。（121頁）

③「日本におけるキリスト教の観念は、これは仮定の議論なんだけれども、母の観念を強調しなくてはいけない」ということ。（121頁）

ここに改めて記すまでもなく有名なことだろうが、『沈黙』以後、「仮定の議論」でありながらも、「母性宗教」の重要性を証明するため、遠藤が度々具体例として引き合いに出すのが、かくれ切支丹だった。遠藤は、かくれ切支丹への興味を『沈黙』発表の3〜4年前から持っていたと述懐している（「日本の沼の中で」（『野性時代』昭54年1月〜6月号）、『切支丹時代――殉教と棄教の歴史』小学館ライブラリー　平4年2月　147頁）し、『沈黙』の前奏曲となった短編「その前日」（『新潮』昭38年1月号）には踏絵が登場し、同じく短編「帰郷」（『群像』昭39年9月号）では、現在、遠藤周作文学館の建つ長崎市外海地区からほど近い三重地区を舞台に、遠藤と思しき主人公の祖先がかくれ切支丹であったことなどが書かれ、更には『沈黙』執筆の原動力となった十六番館（当時）の踏絵を見た印象が初めて綴られたエッセイ「踏絵」（『芸術生活』昭39年6月号）でも、初めての長崎旅行でかくれ切支丹を訪ねたと記している（124頁）。このように、遠藤は『沈黙』上梓以前からかくれ切支丹への興味を示しているのだが、こうした『沈黙』以前のかくれ切支丹への言及は、『沈黙』執筆の視点を転び者（弱者）に定めたが故の、肉体的弱さを自認する自分の分身に肉薄していくために紡ぎ出した言葉たちであった。『沈黙』執筆直後の「座談会　井上神父をかこんで」で、自らの文学が進む道の希望的観測を示すための具体例としてマリア観音を引き合いに出しながらも、「仮定の議論なんだけれども」（121頁）と留保したのは、自分はまだ、彼等かくれ切支丹信仰の深部までは掴みきれていないという躊躇いがあったからだろう。それもそのはずで、『沈黙』執筆を決心して以後の長崎への取材は、主に棄教司祭フェレイラの足跡を追うことにあり（「長崎――フェレイラのこと」『走馬燈』毎日新聞社　昭52年5月　33頁）、遠藤がフェレイラのような転び者たちのその後という宿題を得たのは、『沈黙』を書いたからだった（「ひとつの小説が出来るまで」250頁）。

そうした宿題を抱えた遠藤が、かくれ切支丹信仰についての独自の見解を示す文章を書き始めるのは、『沈黙』以後のことである。その手始めとなったのが「『沈黙』についての「決算書」」（北森嘉蔵「『沈黙』の神学――何処への踏み石か」（『月刊キリスト』昭42年2月号）引用は『遠藤周作『沈黙』作品論集』77頁に拠った）と呼ばれる『沈黙』を発表した年の年末に書かれたエッセイ「父の宗教・母の宗教――マリア観音」（『文芸』昭42年1月号）である。ここで遠藤は、先輩作家・正宗白鳥がキリスト教を誤解したのは、彼が厳しく裁く父なる神の側面だけを見たからであり、キリスト教が日本人に受け入れられるには、かくれ切支丹が思慕した母のイメージが伴われなければならないと述べている。またその後、記述そのものが短編「母なるもの」へと直接的に反映された取材記「弱者の救い――かくれ切支丹の村々」（『切支丹の里』人文書院　昭46年1月）においても、長崎のかくれ切支丹・村上近七翁を訪ね、また、かくれ切支丹研究の大家・田北耕也によるマリア観音・納戸神調査を例に、かくれ切支丹がマリア観音や納戸神を思慕したことにこそ、「彼等の切実な「許し」への悲願がこめられている」（『遠藤周作全集13』104頁）と捉え、エッセイ「父の宗教・母の宗教」での主張を、補強していく。つ

まり、これらのエッセイでは、「座談会　井上神父をかこんで」で示した「仮定の議論」を立証していく目線で、かくれ切支丹信仰を捉え続けていたと言える。

そうしたなか、『沈黙』執筆から13年を経て、また若き日からの聖書研究の集大成ともいえる日本人にも納得できるイエス・キリスト像を描いた『イエスの生涯』（新潮社　昭48年10月）『キリストの誕生』（新潮社　昭53年9月）を執筆しおえた昭和54年、遠藤は、かくれ切支丹信仰について、カトリックとの比較を通して最も深く考察した論考「日本の沼の中で」（「野性時代」昭54年1～6月号）を発表する。ここにおいて遠藤は、自分がかくれ切支丹の人々に興味関心を抱いたのは「彼等は我々に基督教が土着化するためにはどのような変形をするかの良所と欠点とを共に教えてくれたから」（211頁）だと語っている。この論考が重要なのは、管見に入った限りのかくれ切支丹言及のなかで、唯一、良い点だけではなく、「かくれ切支丹を素材に学ぶべき（略）欠点」についても述べている点にある。

前述した通り、遠藤による多くのかくれ切支丹言及は、母の観念を大切にせねばならぬという良所ばかりを強調するかたちでなされてきた（例えば、「父の宗教・母の宗教――マリア観音について」、「日本人の宗教心理について」（「京都新聞」昭43年10月14日）、「弱者の救い」など）。良い点だけを見た場合、カトリックが日本人の心に馴染む様相を追究した遠藤にとって、彼等が赤ん坊を抱いた農婦を描いた聖画（納戸神）や、菩薩像を聖母マリアに見立てたマリア観音信仰を行っていることは、日本人が「父親のように自分を裁いたり、罰したりする宗教ではなく、自分を許してくれ、自分と一緒に苦しんでくれる母親のような宗教をほしがっている」（「おっ母さん」（「朝日新聞」昭47年9月4日）ことを例示し、このことが、『沈黙』でロドリゴが思い浮かべるキリストの顔が、日本の風土に足を踏み入れれば踏み入れるほど女性的な風貌に変化していくよう描いたことの正当性を訴える根拠となる。そのため、納戸神・マリア観音信仰は、『沈黙』批判渦中での回答書であるエッセイ「父の宗教・母の宗教」でも、カトリックが日本化するために通過せねばならぬ道として、積極的に言及された（『遠藤周作文学全集12』374～376頁）。だが、彼等かくれ切支丹の母親信仰と、遠藤が目指したカトリックの日本的変容としての母親信仰には、大きな違いがあることを、少なくとも『沈黙』執筆後の遠藤が認識していたことを、論考「日本の沼の中で」は示している。それが、遠藤がこの論考で示した「かくれ切支丹を素材に学ぶべき（略）欠点」（211頁）である。その違い、つまり欠点は、次のように把握されている。

かくれ切支丹のなかに、とりわけマリア信仰の強まった（略）の（略）は彼等の信仰が「後悔と許しの信仰」であるにもかかわらず、許しの対象を十字架で死んだイエスにみつけず、ただ子を許す母の信仰に発見しようとしたためである。聖母マリアは彼等かくれ切支丹たちにとって自分たちを許してくれる母となったのである。（略）『こんちりさんのりやく』に書かれているように基督教における「後悔と許し」とは、一度犯した罪を二度と犯すまじという決心

がなければならぬ。その決心がなければ許しの可能性もまたないのだ。／だが、かくれ切支丹の「後悔と許しの信仰」はこの基督教的な意味と本質的に違う。なぜなら彼等は社会的に転び者として生きることを神に詫びながら、他方、進んで社会的にふたたび切支丹であることを宣言する勇気がなかったからである。旦那寺にやむをえず詣で、毎年一度は踏絵を踏み、その度ごと、後悔の祈り（コンチリサンのオラショ）を唱えながら、彼等は来年も自分たちが同じ行為をすることを知っていた。つまり彼等は「今より以後二たび、もるたる科を犯さず（注、傍線は本文）」という決心を持たなかったのである。（略）／「後悔と許しの信仰」にすがりながら彼等ははじめから、その後悔が再起のための後悔ではなく、どうにもならぬ業に従う自分の運命を歎き悲しむ後悔であることを知っていた。そしてこのどうにもならぬ自分たちの業を仕方なしとして許してもらいたいというのが彼等の信仰だったのである。／これは日本的な、あまりに日本的な信仰である。（略）そこには基督教で言う十字架の意味、イエスの受難の意味も忘却されていたのだ。

（「日本の沼の中で」195～197頁、傍線は池田、以下同）

かくれ切支丹信仰とカトリック信仰との間にある決定的な差。それは、罪を犯した者が再起を願い、そのための努力をなすか否かにある。遠藤がこのような理解に達したのが『沈黙』以後のことだったとしても、批判の嵐に晒された『沈黙』の是非を問われた時、彼がキリスト教の母性的な側面の強調が間違っておらず、またなおかつ、『沈黙』で打ち出した遠藤神学がキリスト教の本旨を違えていないことを今後の創作活動で証明していきたい（「座談会　神の沈黙と人間の証言」64～65頁参照）と表明していたことを思えば、この発言が『沈黙』執筆後13年を経たものであっても、ここから『沈黙』を振り返ることによって、ようやく『沈黙』に描かれた「母性宗教」の存在意義を評価する尺度が入手できるだろう。とすれば、作者自身によるかくれ切支丹信仰理解の終着地点となったこの発言を基点に、『沈黙』の表現に則り、『沈黙』がキリスト教の本旨を違えていないかどうかを確認する最大のポイントは、踏絵を踏んだロドリゴが、その後「社会にふたたび切支丹であることを宣言する勇気」を持えているのか否か、にある。

## 『沈黙』で描いた母性的なキリスト教
## ――かくれ切支丹調査から振り返って

禁教下で再び切支丹であることを宣言することは、死を意味する。また『沈黙』は、歴史の闇に葬られた転び者たちの魂に光を当てることを意図していたのだから、ロドリゴが奉行所に信心戻しを願い出て処刑されては、結果的に殉教者のみが救われる物語となり、執筆意図の大前提が崩れてしまう。そうしたなか、後年の述懐・「沈黙の声」（70～71頁）で作者が解説した通り、棄教あるいは殉教、という厳しい究極の選択しか提示されてこなかった迫害下にあって、ロドリゴが棄教後も内面において独自の新たな「信仰」を持ち続けただけでなく、再び「自分

はキリスト教徒である」と申し出たために再度拷問にかけられ、新たに棄教の誓約書を書かされていたことが「切支丹屋敷役人日記」に描き込まれているとするなら、いつの日か禁教が解かれた時、たとえそれが「私のイエス」を信じる道であったとしても、最終章には、ロドリゴが再び信仰の道を歩むであろうという希望が暗示されていると読める。また、棄教という信仰の死か、殉教という肉体の死のどちらかしか見出すことのできなかった局面にあって、遠藤は絵踏み後のロドリゴに「私の今日までの人生があの人について語っていた」（「沈黙」、引用は『遠藤周作文学全集2』平11年6月　325頁に拠った）と語らせ、生きた屍としての余生を過ごした彼の哀しみを包む微かな信仰のありようを確かに描き込んだ。そして後年、ロドリゴのモデルとなった南蛮宣教師キャラの棄教後を世話した下男夫婦を短編「召使たち」（「文芸春秋」昭47年1月号）で描き、禁教下にも拘らずキャラを世話した下男・下女が切支丹となった切っ掛けを、キャラの「苦しい孤独な生涯」を象徴する「屈辱の泪」にあったと推測し、転びバテレンの絵踏み後の信仰と、その聖なる人生に触れた夫婦に刻まれた「イエス」の痕跡を描き出している（『遠藤周作文学全集8』新潮社　平11年12月　145頁）。こうした描写を考慮した時、作者は、絵踏み後のロドリゴの再起を願い、それを信じた上で、小説を創ったと考えられる。

だが、論考「日本の沼の中で」における遠藤による日本人の宗教心理解を踏まえた時、以上のようにロドリゴの信仰を肯定していく読みを展開していくには、ひとつの重大な前提が必要となることを思う。その前提とは、ロドリゴが孤独の中で持ち続けた信仰が、日本人の転び者たちと同じように、ただ許しを乞うだけのものにならないということだ。遠藤は、踏絵を「踏んでも平気だ」などという乱暴な読みを示す読者が出現したら、「その世界にはいったらおれの「沈黙」とは全く関係ない世界だ」と言い切った（「座談会　井上神父をかこんで」124頁）。躊躇いなくこう述べるのは、『沈黙』は、ロドリゴという旧司祭・西洋人を視点人物としたため、遠藤がかくれ切支丹や浄土真宗における信心調査から学んだ日本人の宗教心における特性（詫びて許しを乞うだけの信心）にまで注意を払う必要がなかったからだと考えざるを得ない（江藤淳は、『成熟と崩壊』（河出書房　昭42年6月）においてロドリゴの精神性はあくまで日本人的にしか描かれておらず、作者はロドリゴを終始「司祭」という役割に忠実なものとして描いていると指摘している（165～166頁）が、小稿は、この部分を「司祭」の役割に忠実な西洋人・ロドリゴとして捉える）。そう考えることによって、最終章及び「切支丹屋敷役人日記」に描かれた絵踏み後のロドリゴが、その胸中に「私のイエス」を抱き続けたことは、それだけでいつの日か再び切支丹であることを宣言する勇気の証であり、ペトロ信仰の異型であり続けられる。つまり、『沈黙』は西洋人であり旧司祭を視点人物に設定したことによって、ロドリゴの信仰が、「私の主の発見」であったとしても、少なくとも、日本的「後悔と許しの信仰」へと形骸化されはしないという前提が、確保され得た。だが、作品の中心的視点人物を日本人に置き換え、その舞台設定のなかで遠藤がキリスト教信仰と取り組

む時、彼は、日本人の精神風土のなかで、キリスト教がかくれ切支丹信仰にみられるような再起を宣言する勇気のない惰性的なものへと変化していくことへの懸念にも、気を配らねばならなくなっていくはずだ。

論考「日本の沼の中で」で示した日本の精神風土への確たる懸念こそなくとも、遠藤は『沈黙』で、沢野忠庵の口を借り、日本を「泥沼」と呼び、西洋的な信の生成土壌との間にある越えがたい壁の存在を認識していた（294～297頁）。また、『沈黙』以前から遠藤は、たとえ「泥沼」にあっても根腐れせぬ信仰を掴みたいという願いを、『海と毒薬』（文藝春秋新社　昭33年4月）発表以降の課題として抱えていた（「座談会　神の沈黙と人間の証言」51頁）。短編「母なるもの」は、『沈黙』以後、遠藤がかくれ切支丹研究を重ね、日本人を視点人物として「母なる神」創出に取り組んだ最も中心的な作品である。とすれば、作中に示された「哀しみの聖母」の意味内容を、作者による昭和54年のかくれ切支丹認識から照らし返すことは、『沈黙』の場合と同じく、遠藤文学における「母なる神」を考えるための重要な視点をもたらすだろう。

## 短編「母なるもの」における「哀しみの聖母」
## ――「良心の規準」としての「母」の行方

前述した通り、『沈黙』の正当性を主張する時に遠藤が引き合いに出したのは、かくれ切支丹信仰における納戸神・マリア観音信仰と、自分自身の母親体験であった。その二つを絶妙に織り交ぜることで物語を構成し、「母なる神」の結晶と銘打たれたのが、短編「母なるもの」（「新潮」44年1月号）である。作中、『沈黙』を書いた遠藤と思しき小説家の「私」は、かくれ切支丹の住む長崎のある島を訪れる。「私」は、地元司祭の紹介で滅多に部外者には会わない「かくれ」の長に会わせてもらい、最終的には納戸神まで見せてもらえることになる。道中、小説家は、いまは亡き厳しかった母の面影を、繰り返し思い出す。そして「かくれ」の島を歩く主人公の脳裏に甦った、音楽家として一つの「音をさがし（略）たった一つの信仰を求め」た母の面影（「母なるもの」、引用は『遠藤周作文学全集8』新潮社　平11年12月　38頁に拠った）が、時を経て、生前母が大事にしていたマリア像の眼差しと重なり、その二つが同化した哀しみの聖母の眼差しが、更に納戸神に描かれた農婦の母の眼差しと溶け合う（55頁）。この二段階の変容を遂げて誕生するのが、遠藤が追究した日本人に合ったキリスト教「哀しみの聖母」のイメージである。『沈黙』で描いた母性的キリスト像の正当性は、このようにして、主人公の母親への意識をまずは「哀しみの聖母」へと移し、その上でかくれ切支丹が納戸神を慕う意識にまで拡大することで、深められた。だが、論考「日本の沼の中で」で示した懸念を踏まえた時、日本の精神風土のなかでも根付く信仰のありようを示すには、ただ単に日本人の心の琴線に触れるイメージを形成するため、単純に哀しみの聖母と納戸神が同一視されるだけでは済まされないだろう。

主人公が思い出す母の面影の描写は、『沈黙』執筆まもない

頃のエッセイ「母と私」（『母を語る』潮文社　昭42年10月所収）における「良心の規準」としての「母」の姿とほぼ同じだ（エッセイ「母と私」には、短編「母なるもの」に繋がる「良心の規準」としての「母」の他、短編「六日間の旅行」（「群像」昭43年1月号）へと繋がる「自分の弱点を平気でさらけ出」す烈しい女としての「母」の思い出が綴られている。この全体を起点とした「母なるもの」論には、笛木美佳「遠藤周作「母なるもの」論――「一つの秘密」が切り開いた世界」（「学苑」平22年1月号）がある）。だが、エッセイ「母と私」と、短編「母なるもの」における「母」の思い出の記述はほぼ同一でありながら、エッセイのみに、「良心の規準」というキーワードが記されている。

私は書斎に母の写真を飾っているが、私が酒を飲んで悪業を働いて帰ってくると、写真の母は何か怒っているような顔に見えてくる。また、仕事がはかどった時、母の写真を見ると二コニコしているような気がする。同じ写真なのだが、そういうように感ずるのは、私がこんな年齢になっても母を怖いと思うのは、私が母を良心の一つの規準にしているからだろう。／とにかく、考えてみると、私は母に対して迷惑ばかりかけた。私は学生としても悪い学生で、あちこちの学校を受験しては落ちてばかりいて、浪人も三年ぐらいするし、母としては、他家の息子と比較して自慢になるような点は一つもなく、ようやく学校に入学しても教師から呼び出しがくる始末だった。やっと芥川賞を受け、文士として一人前になったが、子供の頃、小説家になれと言ってくれた母は亡くなっていて、受賞後になって、家内や子供をつれて温泉へ行ったりしたが、私はそれまでは一回も自分の金で母を連れて行ったことはないし、こんな温泉へ家内や子供を連れて来ているというようなことが、非常に母に対し申し訳ないという気がする。（略）／これは単に私だけでなく一般の男性が、自分の母とか妻に対して、常に良心――相手は良心で自分は悪い人間だと思うのである。私には母や妻は良心であり、私はいつもその良心をふみつけにする悪い人間だという気持から抜け切れない。私にとっては妻を拡大したのが母親であり、これは世の中の一番いい部分で、しかも、それに対して悪いことばかりして、迷惑をかけてきたのが、私だという気持から抜け切れない感じがしている。（「母と私」、『遠藤周作文学全集12』393頁）

後の論考「日本の沼の中で」におけるかくれ切支丹理解から振り返る時、短編「母なるもの」で示したカトリックの母性的な側面が、キリスト教の本旨を逸脱していないとするならば、『沈黙』以後の遠藤が母なる神を求めた日本的な精神風土と取り組まねばならない難所、「哀しみの聖母」に詫びた「私」がその後をどう生きるよう促されていくのかという問題が生じるが、この問いについて「母なるもの」本文を評価するために必要となるのが、作中における「哀しみの聖母」が、エッセイ「母と私」で綴った「良心の規準として機能していた現実の母の面影」とどの程度融合し、更には、「現実の母の面影」から変化した「哀しみの聖母」が、納戸神とどの程度重なり合うことで生み出されているのかというイメージの形成分析になるだろう。そ

こでまず、「良心の規準」というキーワードを外して創られた作品「母なるもの」で、母の思い出はどのように描出され、納戸神と溶け合う前の「哀しみの聖母」となっていくのかを確認する。作品は、エッセイ「母と私」を土台としながら、次のように構成される。

「良心の規準」としての母からの期待に応えられない不甲斐無い息子・遠藤周作。その息子と思しき短編「母なるもの」の主人公に、殉教のみを栄光とする神の期待に応えられず後ろめたさに苛まれるかくれ切支丹が重なる（「母なるもの」48頁）。その重なりの先に、赦しを乞い願う思いを寛容に受け止める「母」が、短編「母なるもの」の主人公に対しては「哀しみの聖母」のイメージ（55頁）で、かくれ切支丹信仰には納戸神やマリア観音の姿で（50～51頁）、存在する。エッセイ「母と私」での認識を源泉としながら、遠藤は両者の重なりを短編「母なるもの」でこのように創るのだが、まず納戸神と融合する前の段階での「哀しみの聖母」は、次のように創られている。

真夜中まで、上半身を丸めるようにして仕事をしている時、急に彼女を背後に意識することもある。母はうしろから、こちらの筆の動きを覗きこむような恰好をしている。仕事の間は、子供はもちろん、妻さえ、絶対に書斎に入れぬ私なのに、その場合、ふしぎに母は邪魔にならない。気を苛立たせもしない。／そんな時の母は、昔、一つの音を追い求めてヴァイオリンを弾き続けていたあの懸命な姿でもない。車掌のほかは誰もいない、阪急の一番電車の片隅でロザリオをじっと、まさぐっていた彼女でもない。両手を前に合せて、私を背後から少し哀しげな眼をして見ている母なのである。／貝のなかに透明な真珠が少しずつ出来あがっていくように、私は、そんな母のイメージをいつか形づくっていたのにちがいない。なぜなら、そのような哀しげなくたびれた眼で私を見た母は、ほとんど現実の記憶にないからだ。／それがどうして生れたのか、今では、わかっている。そのイメージは、母が昔、持っていた「哀しみの聖母（マーテル・ドロロサ）」像の顔を重ね合わせているのだ。（「母なるもの」51頁）

短編「母なるもの」には、エッセイ「母と私」で綴った自らの信じる芸術や信仰を厳しく求める良心の規準としての母の側面が描き込まれるものの、そうした母の姿がいつしか自分の行動をそっとみつめている母の眼へと変化していく。本文の記述に従えば、「ほとんど現実の記憶にない」母のイメージが、「哀しみの聖母」の持つイメージとなる。エッセイでも短編でも、「私」は生活の様々な場面で母を思い出すのだが、先のエッセイの「私」には、「私が（略）悪業を働いて帰ってくると、（略）何か怒っているような顔」をする良心の規準として機能する「母」が存在した。「良心の規準」として「母」が機能している時、彼女の顔は息子のその日の行動によって良くも悪くも変化するのだが、「哀しみの聖母」は、人々の哀しみに寄り添うべく、常に同じ表情を保つ。短編に記される厳しかった母の面影は「良心の規準」としては充分に機能せず、厳しかった現実の母の眼

差しとは別の次元に存在する不肖の息子を常に見つめる「哀しげな（略）眼」となっていく。このように変化した短編の「母」に、「良心の規準」としての母の役割を、積極的に読み込むには、少々無理があるだろう（短編「母なるもの」に描かれる「母親像」に、良心の規準としての役割を読み込むことで「哀しみの聖母」を「聖トマス的秩序」と位置づけた論考に武田友寿『遠藤周作の世界』中央出版社　昭44年10月がある）。そして、現実の母にはなかったイメージから紡ぎ出された「哀しみの聖母」のイメージが、遂に納戸神と重ねられる。両者が重なり合う場面は、次のように描かれる。

キリストをだいた聖母の絵――いや、それは乳飲み児をだいた農婦の絵だった。（略）私はその不器用な手で描かれた母親の顔からしばし、眼を離すことができなかった。彼等はこの母の絵にむかって、節くれだった手を合わせて、許しのオラショを祈ったのだ。彼等もまた、この私と同じ思いだったのかという感慨が胸にこみあげてきた。昔、宣教師たちは父なる神の教えを持って波濤万里、この国にやって来たが、その父なる神の教えも、宣教師たちが追い払われ、教会が毀されたあと、長い歳月の間に日本のかくれたちのなかでいつか身につかぬすべてのものを棄てさりもっとも日本の宗教の本質的なものである、母への思慕に変ってしまったのだ。私はその時、自分の母のことを考え、母はまた私のそばに灰色の翳のように立っていた。ヴァイオリンを弾いている姿でもなく、ロザリオをくっている姿でもなく、両手を前に合わせ、少し哀しげな眼をして私を見つめながら立っていた。（「母なるもの」55頁）

愚行を繰り返した挙げ句、母の死に目にも会えなかったことを思い出しながらかくれ切支丹の島を歩く主人公の「私」。現代を生きる「私」の後悔の念に、島に眠るかくれたちの霊の念が呼応し、栄光の道（殉教）に足を踏み出すことができず、神に詫びながら生きた彼らが拝んできた納戸神（農婦の母）に、「母」でありながら現実の母にはなかったイメージの「母」の眼差し（哀しみの聖母）を重ねる。こうしたイメージ形成からは、短編「母なるもの」を上梓した昭和46年段階での遠藤が、かくれ切支丹研究を進めながらも、「優しく許してくれる母のような存在」という日本人にとって耳当たりのよいイメージのみを重要なものとして捉えていたと考えられる。むろんこの強調は、カトリックを日本の精神風土に受け入れられるようにするための必須条件であった。だが、論考「日本の沼の中で」で捉えた「泥沼」でも根腐れせぬ信仰のありようを考慮した時、そこには、同時に「良心の規準」としての母のイメージが内在されることが望まれるが、先の引用の記述にある現実の母から聖母像のイメージへの変化を踏まえれば、この重なりのなかに「良心の規準」としての母の機能を読み込むことは、やはり難しいだろう（武田友寿が前掲書で示した「形而上的聖母像」とかくれ切支丹のマリア像の違いを指摘した論文に、辛承姫「母なるもの」（「国文学解釈と鑑賞」平18年2月号）がある）。

佐藤泰正は、短編「母なるもの」に登場する案内役の地元住民（カトリック信者）の「固い背中」の描写を通して、「哀しみの

聖母」と「納戸神」の違いを指摘している（「遠藤周作における「母のイメージ」――「母なるもの」の原像をめぐって」（「国文学解釈と教材の研究」昭48年2月号）。佐藤は、この固い背中と母なるものとの更なる融合と深化とを、作家の進むべき道として求めた（109頁）。「母」を描くことを通して信仰を示そうとした遠藤作品が耕すべき土壌の困難を見抜くことで、「哀しみの聖母」像の良所と欠点とを指摘し、次作への期待を込めたものと考える。

論考「日本の沼の中で」を通し、「泥沼」と呼ばれる日本で信仰が確立されるためには、「良心の規準」として存在する厳しい母に胸を張って対面する努力が必要となることに、明確に気づきつつあったであろう遠藤は、亡くなって30年経ってなお「昔のように今日までの私の信仰うすき生き方を指さしてとがめてくる気さえする」（「還りなん」引用は『遠藤周作文学全集8』新潮社　平11年12月　285頁に拠った）母の遺骨を抱いた自分の姿を、短編「還りなん」（「新潮」昭54年1月号）で、次のように描く（「母」の描写の変遷を分析した論文に、荒井英恵「遠藤周作と〈母なるもの〉――「還りなん」を中心に」（「同志社国文」平10年3月号）がある）。

膝においた骨壺は兄のそれよりもずっしりとした重さがあるような気がする。体も小さく背の低かった母の骨がなぜ、こんなに重いのかと、暑くるしい白っぽい空を見ながらぼんやり考えた。それはこの齢まで持ち続けた母にたいする私の偏愛と愛着のためにちがいなかった。母は私にとって必ずしもやさしい女ではなかった。むしろその孤独な生活や信仰の烈しさのため、惰弱でぐうたらな私は幾度となく苦しまされた。学生の時、私はそんな母に耐えきれず彼女と離婚をした父親の家に逃げたことさえある。だが父の家に住むと、私は母を見捨てたという悔いに悩まされつづけた。／（でも結局は俺も、同じところに埋められるわけだ）／と私は膝の上の骨壺に囁いた。そして先ほど見た丸い深い、そして暗い穴のことを思いだし、あそこが私が永遠に母や兄と住む場所だと考えた。（「還りなん」292頁）

短編「還りなん」は、論考「日本の沼の中で」が書き出された年の作品である。そこで遠藤は、「信仰の烈しさのため（略）苦しまされた」母、「信仰うすき（略）生き方を（略）とがめてくる」（285頁）やもしれぬ母のイメージを強調している。また、作中、「私が永遠に母や兄と住む場所」（292頁）だと認識し、いつか自分も還る場所であるお墓は、「暗い穴」と喩えられる。また、この「暗い穴」は、飼い主から暴行を受けながらも飼い主の元に戻ろうとする雑種の犬がみせる帰巣本能と同じく、再び叱られるのがわかっていながら還る場所として位置づけられ（290頁）、同時に17世紀、迫害下にあることを知りながらも、フィリピンから故郷・日本へ戻ったミゲル西田の望郷の念とも二重写しの象徴として描かれる（290頁）。こうした「母」の眠るお墓のイメージは、約10年前、短編「母なるもの」で「誰にも言いたくない私と母の会話の場所」（46頁）と喩えられた安らぎの場所ではない。また「母なるもの」で強調された哀しみだけを残した聖母マリア像に同化し、優しく許してくれる対象と共に想起された母（「母なるもの」51～52頁）としてのイメージも、こ

の短編には描かれない。このような描写の変遷を辿るとき、「良心の規準」としての母親像が主人公に促す再起、と同時に優しく許してくれる「哀しみの聖母」としての母親像。いつの日か、この二つの母親像がせめぎ合うイメージを持つ聖母像が確立されることが、かくれ切支丹が教えてくれる良所と欠点とを踏まえた遠藤の「母なる神」の到達点であったのではないかと考える。

## おわりに――「泥沼」としての日本が孕む困難

遠藤文学が目指した日本人の心に合ったキリスト教信仰「母なる神」は、一方ではキリスト教の母性的側面を強調することで日本人の心の琴線を掴むことを目指し、他方では、日本的な後悔と許しの信仰のみに堕することを防ごうとしたと推測する。そしてこの2点こそが、遠藤がかくれ切支丹調査を経て得た真の成果であったと考える。だが同時にこのことは、転んだ人間に、その後の一生を肩身の狭い思いをして生きていくことを強いると刀となってもならないだろう。なぜなら、遠藤は、ユダ（キチジロー）の哀しみをも敏感に感じ取るイエスの「愛」を、聖書研究を通して把握しようとしているからである（『イエスの生涯』、『遠藤周作文学全集11』新潮社　平12年3月　166～167頁）。

拷問にかけられたことのない人間が彼等を棄教者を裁くことが出来るのかという『沈黙』の疑問は、前作「海と毒薬」（「文学界」昭32年6、8、10月号）で描いた勝呂の行為（生体解剖実験への参加）について、あの状況におかれなかった人間が裁けるのかという疑問を引き継いでいる。遠藤にとって、到底それは裁ける事柄ではなかったが、遠藤は晩年、「海と毒薬」を書いていた頃の苦悩を、「生体解剖をしてしまう」勝呂の心が、「神を志向するものに変われば（略）希望し」ながらも、「それがなかなか見つからないので、もがいていた」（『人生の同伴者』109頁）と述懐している。こうした苦悩には、勝呂やキチジローやロドリゴのような人々を、人間の哀しみをしるイエスが見棄てないだろうと信じつつも、一方では、「愛」に生きることを貫き通したイエスの生涯を、弱者たちはどのようにしたら倣うことができるのだろうかというもう一つの難問が、含まれていただろう。『キリストの誕生』執筆を通し、キリストの復活をもって誕生した教えの成り立ちを我が身に引き寄せた時、キリストの誕生に弟子たち（ペトロ）の回心と再起を発見した遠藤がいる。小稿は、そのペトロの回心と同質の再起を、遠藤がかくれ切支丹から学んだ日本人の宗教心を矯め直すポイントとして見出したのではないかと推測する。日本的精神風土における遠藤文学の戦いを、このように捉える時、遠藤神学のもう一つのテーマ「同伴者イエス」像を描いた『死海のほとり』（新潮社　昭47年6月）と『侍』（新潮社　昭55年4月）に、対照的な同伴者イエスの姿があることに気づく。この点については、いずれ稿を改めて、考察の機会を持ちたい。

（長崎市遠藤周作文学館）